

—これまでの歩みを紐解きながら、未来を展望し、語り合っていました—



青葉台初等学部 副校長

青葉台初等学部 校長

一ノ瀬 正樹

塚原 裕子

(東京大学名誉教授、武蔵野大学教授、
哲学会理事長、日本哲学会会長などを歴任)

(学校法人塚原学園理事長、
あおば台幼稚園、あおば台第二幼稚園園長)

創立以来、変わらない方針 「本物の自由の追求」

一ノ瀬 まず青葉台初等学部の来歴についてお伺いします。塚原学園は幼稚園の運営から始まりましたが、そこからどのような理念のもとで初等学部が立ち上がったのでしょうか。

塚原 創立者の故塚原港は、幼稚園運営の方針として「本物の自由の追求」という考え方を掲げておりました。例えば「八ツミが自由に使える」といった基礎から始めて「自分」を確立していくというのではなく、自分で道を切り開くことを目指すという意味での「自由」ですね。幼稚園ではそうした方針が功を奏していきましてが、問題はそれを卒園後にどう生かしていくかということでした。そこで、小学校を作った、その方針の継続と発展を促進していこうということ、初等学部の開校を決断しました。

一ノ瀬 初等学部は2009年の開校でしたね。

塚原 そうです。まずは港先生が筑波大の杉原先生の門を叩き、やがて2つの幼稚園の先生方とともに児童心理を学びました。杉原先生は開校直前にお亡くなりになりました。私たちがはかなりの覚悟を持って、初等学部を開校することになりました。先生方や職員の方々のご尽力のおかげで今日に至りました。塚原港は、すでに触れたように、自分を確立する、つまり「自分を生きる」という歩み方を子どもたちに身につけてほしいと思いつきながら、そこにアカデミックな活動の重要性を強く込めておりました。小学生の段階から、物事を一方向からだけでなく、多角的に眺める力、塚原港の言うことで「生きる力」を養ってほしい、アカデミックな態勢ではないでしょうか。

遊び、学ぶ。「なぜ」の問い 非認知能力育成の重要性

一ノ瀬 なるほど。青葉台初等学部の新しいスローガン「遊び、学ぶ。」に、やはりつながりがありますね。これは、分かります。まず、キッズなスローガンですね。まず、遊ぶ。それが、そもそも人間の文化や学問は、様々な物事に、好奇心を持って、関心を向けたりして、「どうして」「なぜ」という「問い」を抱くことから始まっていると思います。この点はかつて、ホイジンガの提起した「ホム・ルーデンズ（遊ぶ人）」という人間規定と照応します。ホイジンガは、人間は遊ぶことによって文化と学問を進展させてきたと述べています。家庭で土と接しながら遊ぶ時、石の下からダンゴムシが出てきたのを見て、「どうしてこんな虫がこういう場所にこんなにくさんいるんだろ？」などと問いをいだくことから勉強は始まるといったようなことでしょうか。元々、学校を意味する「スクール」は、ギリシア語の「スクーレ」を語源とします。そして「アスコレ」は、「余暇」を意味します。余暇と言っているのは学校に不相应に響きますが、たぶんこれは好奇心や問いを抱く「心の余裕」ということだと思っています。

「心の余裕」は「忙中閑あり」という言葉にあるように、忙しい時でもその気になれば持てます。むしろ、忙しくしている時こそ「心の余裕」を持つことが大切であり、いや忙しい時の「心の余裕」こそが、真価を發揮するような「心の余裕」かもしれません。そして「心の余裕」のある人、他者にも優しく接し、感情を適切にコントロールもできるのではないかと思います。生活態度という点でも「心の余裕」は非常に有意義です。小学校での共同生活で培ってほしいモジュールです。こうしたモジュールの育成は、青葉台初等学部のような少人数教育で最も有効に育むことができると思います。大きな利点ですね。

ウェルビーイングな未来へ 自己肯定感の高まり

一ノ瀬 こうした「学ぶ」については、「Essp. For you」という標語で表現されています。もちろんこれは「Essp. For you」（特別にあなたのために）を意味した表現です。EはEnglish、SはSports Science (sp.)、そして、Pは、私が参加のPhilosophy (哲学)です。英語はもちろんネイティブの方を招いて指導していただき、科学についてはやはりゲストティーチャーを招いたり、博物館などの校外学習にも行ったりします。そして哲学ですが、子どもたちの哲学 (Philosophy for children、略してP4C)という教育が、世界的に盛んになりつつあり、それを青葉台初等学部で行っているわけです。例えば、亡くなった先祖は全くどこにもいない（非存在）のか、それとも単にどこにはいない（不在）だけなのか、といった根源的な問いを立てて、あれこれ論じるのがP4Cです。P4Cは、実は国語や算数などの他教科の能力向上に役立つのではないかと、これが期待されています。実際、高校や大学での面接試験では哲学的な問いが出されることが多々ありますので、色々な意味で有意義だと思います。

塚原 私としては、保護者や教師など大人が「子どもを守りたい」という思いが強すぎて、子どものためにレールを敷いてあげてしまふ場合、子ども自身の「自分を生きる」というあり方を阻害してしまふおそれがあるかもしれないと感じています。

やはり、「主体性」と「当事者性」が育まれ、子どもたちが自身の内発的な動機付けがあつて初めて、「自分を生きる力」が培われるのだと思っています。けれども、主体性と当事者性を持つということは、そう簡単ではありません。訓練が必要ですね。

塚原 それは今日の言葉でいう、「非認知能力」に当たる力ですね。

一ノ瀬 まさしく「非認知能力」と言ってもいいと思います。非認知能力にはいろいろな側面がありますが、例えば、「好奇心」「批判的思考」「感情の調整」などは、青葉台初等学部の教育方針を表すキーワードになると思います。そしてこれは「遊び」に発する態度ですが、それは同時に「学ぶ」、つまりは「認知能力」の育成へと結びついていきます。

学ぶこと Essp. For you

塚原 「学ぶ」という面ですが、青葉台初等学部では「学ぶ」側面に非常に多くの力を注いでいます。大きなカリキュラム上の特徴としては、子どもたちが自身が主題を設定して、探究的な見方・考え方を働かせて学習を進めていくフリアクティブ活動、運動会に当たる音楽活動や演劇を発表したりする音楽エキサイトフェスティバルなどがあります。いずれも遊ぶことに基づいて、学ぶことを実践していくことを促す活動です。

一ノ瀬 そうですね。それらの活動は保護者の皆さんも、とても楽しみにしているプログラムですね。とくに体を動かす、運動する、ということには「遊び、学ぶ。」の核心に位置することなので、とても重要だと思います。「健全なる精神は健全なる身体に宿る。」です。青葉台初等学部では、例えば、ボルダリングの専門家を招いて、そのようなスポーツの指導もしています。また青葉台エキサイトフェスティバルで展開される音楽教育も、とても大切なことです。音楽は中世ヨーロッパの教育では絶対の必須科目でした。数学や科学、情操教育、そして身体運動と、音楽にはいろいろな学びが組み合わさっていますね。

塚原 私は、こうした訓練を積み重ねることを促してあげること、それがまさしく学校、特に小学校の使命だと思っています。そして、いまの子どもの私たちは「自己肯定感が低い」ということが問題になっていますが、それを克服して、「自己肯定感の高まり」をぜひ達成してほしいと思います。この点では、やはり青葉台初等学部の少人数教育は、とても効果的ですね。教員たちの目線が厚く届きますからね。

一ノ瀬 青葉台初等学部を卒業した子どもたちの将来像、それは、どのようなものでしょうか。

塚原 「自分を生きる力」を持った人、自立した幸せな人生を送れる人、そうした人を育成することが目標です。そしてその先には、社会や人類の発展に貢献できる人材となることを思い描いています。人は一人では生きられません。必ずや社会や共同体の中で生きるわけです。そこを見据えた教育を目指します。

一ノ瀬 「幸せ」を明確に表現する言葉として、「ウェルビーイング」(Well-being)という言葉が使われます。「ウェルビーイング」とはおおよそ「個人および社会が健全でポジティブな状態」を意味します。社会が健全ということが含まれているのがポイントですね。この言葉を使うならば、青葉台初等学部で学ばれた人は、当人にとっても、そして社会にとっても、「ウェルビーイングな未来」を構築できる人材になってほしいと、そういうことと原でしょうか。

塚原 まったくその通りです。そしてそれは、「なつてほしい」という希望を超えて、青葉台初等学部が「そういう人材に育つよう全力で促していく」という決意になります。何か光が見えてきますね。

青葉台初等学部
茨城県南の私立小学校
HPはこちら↓